

2 総括及び考察

総括

全ての子供たちの可能性を引き出す「学習者主体の学び」へ ～教師に求められる「観」の転換～

「はじめに」で記載したとおり、本県の調査結果について、小学校では、国語、算数はほぼ全国平均と同等となり、理科は全国平均を上回りました。また、中学校では、国語、理科は、悉皆調査が再開した平成25年以降、初めて全国平均と同等となりました。このような結果から県教育委員会としては、各学校及び各市町村教育委員会の取組の成果により、全体としてみれば、着実に学力が定着してきているものと考えております。

一方で、学力調査を観点別に見てみると、「知識・技能」に係る調査結果では全国平均と同等又は上回る結果となったのは6教科中5教科であるのに対し、「思考・判断・表現」に係る調査結果については、6教科中2教科にとどまりました〔表1〕。また、児童生徒質問紙を見ると、自己肯定感や自ら学びを調整する力といった「学びに向かう力、人間性等」に係る調査結果については全国平均を下回る結果も多く見られました〔表2〕。

では、なぜ、こうした状況になっているのでしょうか。学校質問紙や児童生徒質問紙を基に分析したところ、県教育委員会としては、本県における指導（学び）の在り方に課題があるのではないかと考えました。以下、これらについて詳細に見ていくこととします。

1 学力の状況

(1) 「知識・技能」及び「思考・判断・表現」について（「目に見える学力」について）

「知識・技能」に係る調査結果の正答率がよく、「思考・判断・表現」に係る調査結果に課題があることについては上述のとおりですが、その傾向が顕著な教科としては、例えば、小学校の国語と理科があります。それぞれ、「知識・技能」に係る調査結果で2.5ポイント、8.9ポイント全国平均を上回っているものの、「思考・判断・表現」に係る調査結果では、国語は0.8ポイント下回り、理科はわずか0.8ポイント上回っているのみにとどまります。すなわち、全国平均と同等又はそれ以上の結果となった教科（科目）についても、「知識・技能」に係る調査結果における貢献が大きく、「思考・判断・表現」に係る調査結果については、未だに十分な成果が見られない結果となっています〔表1〕。

〔表1〕 本県における学力調査観点別結果

本県		小学校			中学校		
教科	観点	県平均	全国平均	差	県平均	全国平均	差
国語	知識・技能	73.0	70.5	2.5	70.3	69.0	1.3
	思考・判断・表現	61.2	62.0	-0.8	62.6	62.3	0.3
算数 数学	知識・技能	68.2	68.2	0.0	55.0	59.9	-4.9
	思考・判断・表現	55.9	56.7	-0.8	33.3	36.2	-2.9
理科	知識・技能	71.4	62.5	8.9	46.2	46.1	0.1
	思考・判断・表現	64.5	63.7	0.8	50.1	51.0	-0.9

※ 県平均、全国平均の数値は正答率（％）

(2) 「学びに向かう力、人間性等」について(「目に見えない学力」について)

次に、学力の土台である「学びに向かう力、人間性等」に関する項目について、質問紙を基に分析をしてみました【表2】。その結果、「自分にはよいところがあるか。」といった自己肯定感に関する項目は、全国に比べて小学校で7.0ポイント、中学校で6.9ポイントと大きく下回っており、また、「難しいことでも、失敗を恐れなくて挑戦しているか。」「自分で計画を立てて勉強しているか。」といった項目では、小・中学校ともに全国を下回る結果となっています。このことから、自己肯定感や挑戦心など自ら学ぶ力に関する項目、つまり「学びに向かう力、人間性等」に係る調査結果についても、課題が見られることが分かります。詳細については、考察①で改めて分析していきます。

○ 「学びに向かう力、人間性等」に関する質問

【表2】 児童生徒質問紙から（全国との比較）

質問項目	小学校			中学校		
	県平均	全国平均	差	県平均	全国平均	差
自分によりところがあるか。【自己肯定感】	32.4	39.4	-7.0	29.1	36.0	-6.9
先生は、あなたのよいところを認めてくれていると思うか。【自己肯定感】	38.8	46.3	-7.5	32.1	39.9	-7.8
自分でやると決めたことは、やり遂げるようにしているか。【粘り強さ】	38.5	38.8	-0.3	37.4	36.8	0.6
難しいことでも、失敗を恐れなくて挑戦しているか。【挑戦心】	25.7	27.6	-1.9	19.2	21.4	-2.2
自分で計画を立てて勉強しているか。【学びに向かう力】	24.1	27.5	-3.4	14.4	15.4	-1.0
学習した内容について、分かった点や、よく分からなかった点を見直し、次の学習につなげているか。【メタ認知】	33.3	33.2	0.1	24.2	25.6	-1.4

※ 数値は「当てはまる」と回答した割合(%)

2 学力の状況に係る評価

このように、本県においては、学力の三要素である、「知識及び技能」、「思考力、判断力、表現力等」、「学びに向かう力、人間性等」のうち、「知識及び技能」については、全国と同等もしくは上回っているものの、「思考力、判断力、表現力等」、「学びに向かう力、人間性等」については全国を下回る結果となっています。

それでは、こうした本県の「学力」の現状について、どのように評価をしたら良いでしょうか。まずは、たとえ「知識及び技能」に関する調査結果の正答率の向上が中心であったとしても、それは、学校関係者の方々の学力向上に係る強い意識の表れであると捉えており、こうした意識については、引き続き強く持ち続ける必要があると考えております。

一方、学力の三要素のうち二要素が全国平均を下回る結果にある中において、我々、教育関係者は、胸を張って、「本県の学力は向上している」と言えるのでしょうか。児童生徒が、社会の変化に主体的に関わり、自らの可能性を発揮し、より良い社会と幸福な人生の創り手となる力を身に付けられるようにするためには、「学びに向かう力、人間性等」を土台として、「知識及び技能」、「思考力、判断力、表現力等」を含めた学力の三要素をバランスよく育むことが重要であり、「学力向上の質」を今まで以上に追求していくことが求められます。そこで、今一度、学力とは何かについて考えてみたいと思います。

3 そもそも学力とは何か？

学力については、例えば、学校教育法第30条において、「生涯にわたり学習する基盤が培われるよう、基礎的な知識及び技能を習得させるとともに、これらを活用して課題を解決するために必要な思考力、判断力、表現力その他の能力をはぐくみ、主体的に学習に取り組む態度を養うことに、特に意を用いなければならない。」とされており、学習指導要領においては、「児童生徒の発達の段階や特性等を踏まえ、『知識及び技能』の習得と、『思考力、判断力、表現力等』の育成、『学びに向かう力、人間性等』の涵養という、資質・能力の3つの柱の育成がバランスよく実現できるようにすること」が示されています。

また、図1は資質・能力の3つの柱を氷山のイメージで表したモデルです。このモデルからも分かるように、とすれば、見える学力（知識及び技能）のみが学力だと捉えられがちですが、学力とは、見えにくい学力（思考力、判断力、表現力等）や見えない学力（学びに向かう力、人間性等）も含んだ概念であり、未来社会で生き抜く力を育むためには、この3つの学力を併せて「学力」と捉え、これらを一体的に育成していくことが大切です。

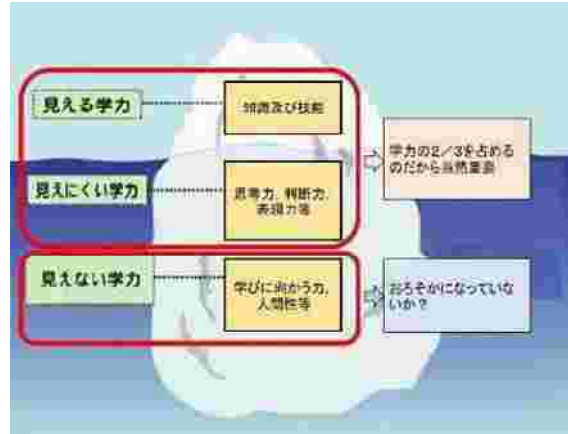


図1 氷山モデルで見たときの学力の捉え（イメージ）

梶田 毅一（1994）の学力の氷山モデルを基に作成

特に、非認知能力等を含む「学びに向かう力、人間性等」を身に付けさせるためには、教師主体の一律一斉一方向型の指導だけでは十分でなく、学びの在り方の本質を問い直すことが求められます。その際、総合的な学習の時間における「探究」の考え方を、各教科にも活かしていくことも重要な視点です。

併せて、授業だけでなく、学校行事や特別活動、部活動などの「学校ならではの」をフル活用し、社会で求められる真の「学力」を育むことが大事なのではないでしょうか。

また、文部科学省の資料では、「今の子供たちが活躍する2030年の社会は、さらに変化の加速度が増し、複雑で予測困難なものとなります。そうした変化は、どのような職業や人生を選択するかに関わらず、全ての子供たちの生き方に影響をするものと予想されます。社会の変化に対して受け身の観点に立てば、子供たちは、自分の人生を切り拓いていくことが難しくなります。」と述べられています。

そのような時代を生きていく子供たちだからこそ、「知識及び技能」だけでなく、「思考力、判断力、表現力等」、「学びに向かう力、人間性等」など、学力の三要素をバランスよく身に付けることが重要であり、教師は学校教育にしか成し得ない、真の意味での「学力」を子供たちに身に付けさせるために、何を為すべきかを、今一度、問い直す必要があります。

県教育委員会としては、今年度、様々な施策を展開するにあたり、学力とは何かという本質論にこだわり、県指導主事等会議や県教育事務所指導課長等会議、学力向上フォーラム等において、本県教育関係者の皆様と、幾度となく議論を行ってきました。そもそも学力とは何か、そのために私たちは何を為すべきか、私たちの学力向上策はこれでいいのかを、皆さんと一緒に問い続けてきました。本質を見つめ直す過程では、新たな発見や気づきがたくさん生まれます。「そもそも『振り返り』って何でするんだっけ?」「そもそも『めあて』ってなんで書くんだっけ?」などといった会話から、「であれば、今の時代、もっとこんな方法があるんじゃない?」「他にもこんなこともできるよね?」など、とすれば授業のルーティンとして流されがち

一つの意味を見つめ直し、より良い手段へと昇華される過程が所々で見られたのはとても刺激的でした。

また、「学力とは何だったか?」「テストで良い点数をとれることが学力なのか?」「そこだけが目的化してしまえば、点数によるテストのない社会に出てから子供たちが困るのではないか?」「子供が未来社会で真に必要な力を育むのが学校教育の意義ではないか?」「それでは、未来社会で必要な力とはどのようなものか?」「そのためには、どのような学び(授業)が求められるのか?」。子供のことを思う教育関係者の皆様が一堂に会せば、当然のように、至る所でこうした議論が始まりました。

ともすれば、学校現場においては、日々の業務に忙殺され、こうした「そもそも論」を語る暇さえないと聞きます。しかし、お互いの教育観や教師観、授業観、子供観などを交流させることで、一人一人の考え方(観)の転換やアップデートが図られます。そしてそのことは、子供たちの学びへと直結するものです。ぜひ、学力についても校内研修を始め様々な場面において議論していただき、本質から、学力向上の在り方について見つめ直していただくようお願いします。

4 学力の三要素のバランスが崩れている要因

ではなぜ、本県において、学力の三要素のバランスが崩れてしまっているのでしょうか。また、こうした真の意味での「学力」を身に付けさせるためには、どのような学びが必要なのでしょうか。

授業に関連する質問紙を見ると、教師が回答する学校質問紙 [表3] では、小・中学校ともに、「指導方法の改善や工夫を行った」という項目が全国を上回っています。また、小学校では「主体的な学び」、「協働的な学び」に関する項目が全国を上回っています。一方で、児童生徒が回答する児童生徒質問紙 [表4] について、同じ質問項目を見てみると、ほとんどの項目で全国を下回っています。このことから、授業改善に関して教師は意識が高まっている、もしくは、取り組んでいると思っているものの、児童生徒はそうした実感を持ち合わせていないことが分かります。

○ 授業に関する質問(学校質問紙と児童生徒質問紙との比較)

[表3] 学校質問紙から

質問項目	小学校			中学校		
	県平均	全国平均	差	県平均	全国平均	差
解決に向けて、自分で考え、自分からできていると思うか。【主体的な学び】	26.4	19.3	7.1	17.7	19.2	-1.5
話し合いなどの活動で、自分の考えを深めたり、広げたりすることができていると思うか。【協働的な学び】	18.4	15.1	3.3	14.4	20.3	-5.9
習得・活用及び探究の学習過程を見通した指導方法の改善及び工夫を行ったか。【指導方法改善】	34.6	21.2	13.4	23.9	20.7	3.2

※ 数値は「当てはまる」と回答した割合(%)

[表4] 児童生徒質問紙から

質問項目	小学校			中学校		
	県平均	全国平均	差	県平均	全国平均	差
課題の解決に向けて、自分で考え、自分から取り組んでいたか。【主体的な学び】	27.8	30.5	-2.7	27.4	31.2	-3.8
話し合う活動を通じて、自分の考えを深めたり、広げたりすることができたか。【協働的な学び】	35.8	37.7	-1.9	32.0	34.1	-2.1
自分にあった教え方、教材、学習時間などになっていたか。【個別最適な学び】	38.0	36.7	1.3	18.8	22.8	-4.0

※ 数値は「当てはまる」と回答した割合(%)

なぜ、教師と児童生徒にこのような差が生じているのでしょうか。それは、教師が「したつもり」になっているからであり、換言すれば、教師主体の「何をしたか」、「どう教えたか」ベースの視点での指導が行われているからではないでしょうか。

学習指導要領では、「何を教えたか」という教師の視点でなく、「何ができるようになったか」という、子供の視点での学びの重要性が示されており、子供たちが学んだ事実や感じた事実を大切にすべきことは言うまでもありません。

「子供たちが本当に課題意識をもって取り組んでいるのだろうか。」「話し合いを通じて、自分の考えを深めたり、広げたりしているのだろうか。」佐藤(2022)は、静かに教師が書いた板書を綺麗にノートに書き写すだけのような児童生徒の姿を、学んだふりをして学びから逃走していると指摘し、これを「学びの偽装」として警鐘を鳴らしています。そして、「伝統的な一斉授業を行っている教室では、ほとんどの子供が学びの偽装を行っている。」とまで述べています。

こうした状況を打破するためには、まずは、子供主体・学習者主体へと発想を転換することが何より重要です。その上で、教師が「何を教えたか」、「どのように教えたか」ではなく、その結果として、「子供たちがどのような反応をしたか」、「どのように感じたか」、「どのようなことができるようになったのか」等、「子供たちの学びの姿」に基づき、授業改善につなげていくことが求められます。

このように、そこに子供の学びがあるのかということを常に意識することで、教師と児童生徒との意識の差が縮まるとともに、学習者主体の授業へと改善されていくのではないのでしょうか。

現在、県教育委員会が取り組んでいるコアスクールプロジェクトは、その考えを基に実践しています。また、本プロジェクトに限らずこうした取組を参考に、「子供が学んでいるか。学んでいるか。」の視点から授業を捉え、子供の視点から議論する習慣が大切です。



コラム 学校全体を学習者主体の授業へと変革させるために ～コアスクールプロジェクトの取組～

県教育委員会が取り組んでいるコアスクールプロジェクトは、子供の学びの姿に着目した校内研修を展開することで、授業改善や組織活性化へとつなげていく取組です。

1 子供の学びの姿(事実)からスタートする

校内研究授業では、子供たち一人一人の学びの姿を丁寧に見取ります。推測や評価を一切入れず、「首をかしげていた。」「すぐに鉛筆を持って書き出した。」等、子供の学びの姿(事実)のみを付箋に書き込みます。

2 子供の学びの姿(事実)の解釈について交流する

付箋に書かれた子供の学びの姿のもつ意味について、お互いの解釈を交流する中で、教師一人一人がもっている授業観や子供観など、お互いの観の揺らぎが始まります。新たな気づきや発見が生まれ、教師が子供の学びの姿を見取る力が高まるとともに、代案を示すことにより指導方法等についての考えが教科の枠や校種の違いを超えて深まっていきます。

3 目指す子供像に迫られていたかどうかを検証する

子供の学びの姿の背景を子供の立場で考え、目指す子供像に迫るヒントを探し出します。

4 共通実践事項を検討し、実践する

子供たちのために、何をすべきか。全員で取り組むべきことを話し合い、実践していきます。

5 学習者主体の学びとは何か

「子供は生まれながらに自らを成長・発達させる力（自己教育力）をもっている。」

これは幼児教育者であるモンテッソーリの言葉です。予測困難な時代においては、誰も正解を教えてくれません。こうした未来社会において、子供たちは自ら考え、自ら学んでいく必要があります。

一方で、今回の学力調査の結果を見ると、未だに知識・技能の定着に重きをおいた教師主体の授業が展開されていることが危惧されます。知識・技能の定着自体は当然に必要なことではありますが、予測困難な時代において知識・技能などは陳腐化するスピードも速いとの指摘もある中、身に付けた知識や技能を基に思考、判断、表現したり、自ら学んだりする力も今まで以上に重要性を増していきます。そうした観点から、学びの在り方を見つめ直す必要があります。

学校教育において、教師主体の授業によりあらゆることを教え込まれた子供たちは、いざ社会に出てから教えてくれる人がいなくなった際に立ちゆかなくなってしまう。こうした時代がすぐ近くの未来社会に待ち受けているからこそ、子供は本来有能な学び手であるという原点に立ち返り、「学習者主体」の授業を展開することが重要です。学校教育は大きな転換期に来ています。この時代に子供たちの学びに関わることができると喜びを感じながら、学習者主体の授業へ歩みを進めていきましょう。詳細については、考察②で改めて分析していきます。